

暗れ渡った春の空に、非常を告げる警報がけたたましく鳴り響いている。街灯の上部に設置された赤色燈が、いたるところで慌ただしく回転している。

けれどそれに足を止めるものも、逆に血相を変えて逃げていく人もいない。区画整理の行き届いた街並みはがらんと静まり返っていて、そもそも人影など見受けられない。

「なぜなら、今この場所にいる人間は、敵を倒さんとする戦闘員か、そうでなければ逃げ遅れて救出を待つ被補食者のどちらかだからだ。

無人の路面を打つように、ヘリの重いローター音が降りてくる。その音を追いかけて、複数のエンジン音が響いた。

アスファルトに軋みを上げさせながらビル群の陰から姿を表したのは、五機の装甲車両だった。

否、それらは車両と呼ぶには少しばかり様相を異にしている。

どれも車輪を移動手段としているが、その上に乗ったボディは車両とはいえない形状をしているのだ。

まず、縦に長いボディの上部には、頭部と思しきパーツが

取り付けられている。そこには、外部の状況を把握するためのカメラが複数、目のようにはめ込まれていた。

ボディの側面には、確かに「腕」と呼んでおかしくないパーツが二本突き出している。本物の腕のように関節を持つている。そして、それぞれの手には、某かの武器が握られているのだ。

おのおのが派手な原色に塗装されているそれらは、まるで前世紀に社会現象となったロボットアニメのメカを彷彿とさせた。さだめし、人型をとり損ねた戦闘ロボットといったところか。

『目標は、千五百メートル前方。三、いや、五体を目視確認。要救助者は、あー、観光バス一台だ。車両内部の人数は未確認。外部に数名取り残されている模様』

『外部う？』
スピーカーから流れる状況報告に被さるように、怒鳴り声が響いた。

『それつてもうダメだろ。持っていかれてなくても、間に合わねエって！』

マイクのそばで声を張り上げたのだろう、音がひび割れている。キーン、と目裏に響くような不快音に、九華は眉根を

寄せた。

割れた声を発したのは、彼女の右前方をいく真つ青な機体のパイロットだ。縦にも横にも大きな機体は、大型トレーラーのようなタイヤに支えられ、重低音を響かせながら進んでいく。

『ノイズ、うるさい！ あんたの声は無駄に大きいんだから、ちよつとは気遣いしなさいよね！ それに、ダメかどうかなんて助けてみなぎやわかんないでしょ！』

『だってさあ』

『バグの言う通りね』

男の声を、二つの女の声が遮った。

嘯みつくように叫んだのは、九華の横を走る漆黒の機体の乗り手だ。バグというコードネームを持つ彼女の機体は、ノイズと呼ばれた男の青い機体よりさらに二まわりほども大きい。巨体を支えるのはタイヤではなく戦車のキャタピラだ。アスファルトをめくりあげそうなるをあげて走る機体には、戦車のような砲身まで取り付けられていた。

そしてもう一人、冷静な声の持ち主は、ハイト。九華の左後方を走る機体のパイロットだ。新緑を思わせる鮮やかな緑の機体のフォルムは、すらりとして一番人型に近い。長い両腕には、三メートルを越えそうな長さの武器が握られている。長刀にも似た、少し刃の曲がった近接武器。西洋の死に神が携えていそうな、大鎌だ。

緑色の機体は、小さな車輪を小刻みに回転させ、滑るよう

に走っている。

『ノイズ、わかってるんでしょね。私たちの仕事には、人命救助も入ってるのよ』

『そういうことだ。フォーメーションを組み直すよ。要救助者がいるなら銃火器は使えないね。バグ、ノイズ、装備を交換してバックアップに回って。僕とハイトでまず叩くから、スベア、君は好きに動いてくれていい』

「了解」

九華は答えた。

モニタの中で、重量級の二機がすると脇によけていく。その間を、緑と白の機体がすり抜け、前列へつく。緑色のハイトの機体より一回りほど大きなフォルムの機体は、全身を白一色で彩られている。両刃の長剣を握ったその姿は、白の鎧に身を包んだ騎兵のようですらある。

白い機体のパイロットはフアースト、彼女の所属するチームのリーダーだ。

九華は、二人の後ろに機体を滑らせた。

後方のモニタの中で、バグとノイズが次々と銃火器を取り外していくが見える。重量分だけ駆動性に劣る二人の機体は、その分だけ銃火器の反動に耐えられる構造になっているのだ。